

奥に在るもの

弓月 京介

夏休みの長さは、大学生とニートの境界を限りなく曖昧にするものである、なんてことを一年の夏に痛いほど感じていながら、僕はこの四年目の夏においても卒論を忘れて、危機感と引き換えに得た有り余る時間をどうすることもなく、ひたすらに引きこもり街道を驀進していた。

そんな僕に、プロの引きこもりと言っても過言でもない旧友・冬木が連絡してきたのは、夏休みも残り一週間を切り、残暑という言葉がもはや過去のものになってきた頃であった。

「弓月、瑞龍寺ずいりゅうじに行かないか？」

起きぬけの僕の耳元に、数ヶ月ぶりの声色が響く。その無駄な肉付けを好まない口調は相変わらずだが、その内容に、僕はひどく驚かされた。引きこもるために生まれてきたかのようなこの男からまさか外出の誘いを受けられる日が来ようとは、夢にも思わなかった。

「えっ、ちよつと待て、お前、とうとう外に出る気にな

つたのか？」

電話の向こうから大きなため息が聞こえた。

「君は僕という人間を大きく誤解しているようだ。僕は別に他人と会うことを忌避したりしないし、物理的に家から出ないタイプのいわゆる引きこもりではないんだよ。僕は今の『なにもしない』ということが可能な限り続けばいいと考えて、環境の変化を拒んでいるだけなんだ」

「ピーターパン・シンドロームみたいなもんか？」

「というより、早い話がニートだよ」

ああ。より重症な気がするのは僕だけだろうか？

「ところで、『ズイリリュウジ』って、なに？ 寺？ どこにあんの？」

また、ため息。

「君は、自分の故郷の国宝くらい知らないのか」

「故郷？ ってことは」

「富山県だよ」

盆に実家に帰省することも、当然、墓を参ることもしなかった自分が、なぜ寺に行くことになってしまったのか。不思議な感覚にとらわれながらも僕は車中の人となり、隣の座席でのんびりと司馬遼太郎の「国盗り物語」

を読む冬木を見た。

上野駅で再会した冬木を見たとき僕は初めて、なんの変哲もない人間が駅前に立っているという事に違和感を覚えた。そして、それは今もまだ拭いきれていない。

新幹線で新潟県の越後湯沢駅へ、そこから特急に乗り換える。

「あと一県か」

駅の売店で昼食の駅弁を吟味しながら冬木が言う。どうやら彼の目は「かにめし」と「いくらたらこめし」を行き来しているらしい。

「冬木。正直、まだ折り返し地点にも入ってないぞ」

「なに？」

振り返った冬木はお釣りと「かにめし」を持っていた。瑞龍寺より、福井に行ったほうがよかつたんじゃないのか？

「上野から越後湯沢までは一時間ちよつとで着くんだけど、新潟の細長さは伊達じゃないぞ。越後湯沢と高岡間は二時間半だ」

「隣県に行くだけで太平洋側から日本海側に行く倍の時間がかかるのか」

「そういうこと。指定席で正解だったな。自由席だと、最悪二時間以上立ちっぱなしだからな。帰省ラッシュの頃なんか最悪だぞ」

「想像しただけで足が痛むな、それは」
冬木が顔を歪ませる。

「さて、あと五分か。行こうか」

「弓月、君の駅弁はいいのか？」

「ああ。俺の食べたいの、越後湯沢じゃ買えないんだ」
まいたけ弁当も気になるが、僕には富山県民の意地があった。

「なるほど、『ますのすし』ね」

乗車して間もなくやって来た車内販売で僕が購入した駅弁を見て冬木が呟いた。この全国的にもそれなりの知名度を誇る駅弁は、富山県民のソウルフードといつても過言ではないと僕は思う。

駅弁を平らげて、しばらく全国の駅弁のあれやこれやを話し合っていると、車窓からは海が見える。

「そろそろ折り返し地点かな」

海に反射された陽光が眩く降り注ぐ。冬木は目をしばたかせているが、カーテンを閉める気はないらしい。

「そうだな。糸魚川を過ぎたぐらいからが心理的にはきついんだが」

「三時間近く座りっぱなしだもんな」

そう言う冬木の顔は珍しく笑っていた。引きこもりで

はなくニート、とは言っても久しぶりの外出に心が緩むこともあるのだろう。

「——ところで、そろそろいいか？」

「ん、どうした？」

「いい加減、聞かせてくれないか。なんで、いきなり瑞龍寺に行こうなんて言い出したんだ？」

眩しさに耐えかねてカーテンを引いていた冬木の手が止まる。中途半端に引かれたカーテンは、僕のほうにだけ海に反射した陽光を差し込ませる。眩しさにくらむ視界の中、冬木がゆつくりと口を開いた。

「以前から、個人的な趣味として国宝を見て回りたいとは思っていた。それで、色んなところのサイトとかを見たんだが、瑞龍寺に、少し引つかかるところがあった。実際にこの目で確かめてみたくなった」

「俺を誘ったのは？」

「それについては、なんとなくだ。どうせ暇だったんだろ？」

ぐうの音も出ない。お互いを見合ったまま、ふん、と小さく笑う。

それにしても、冬木がこうまでして見たいと思うものとは、一体なんなのだろうか。問い質しても「着いてからのお楽しみだ」というばかりで、要領を得ない。

ただ、彼が漏らした言葉の中で一つだけ、気になるこ

とを言っていた。

奥に在るものが見たいんだ、と。

高岡に到着したのは、食後の体が睡眠を求め始めた頃だった。首の骨を鳴らしながら改札に向かうと、冬木が驚いたように言う。

「ちよつと待て。仮にも富山の西部の中核が、特急停車駅が、なんで自動改札じゃないんだ？」

冬木の視線の先では壮年の駅員が手際よく乗客の切符を捌いていた。

「富山県は全駅、改札は手動だぞ。富山駅もそうだから。それどころか、金沢でさえそうだから」

「JR西日本はそんなに金がないのか？」

「知らねえよ」

くだらないやり取りをしながら改札を抜け、駅前の通りに出る。

「ああ、これは自動改札じゃないわけだ」

駅前を見て、冬木。

そこに広がるのは、僕にとつては馴染みの、平日午後

の富山県の姿。皆が学校や会社にもっている間に町全体が昼寝をしているかのような、静かな光景だった。

「余計なお世話だ。——で、瑞龍寺までの道はわかるん

だろうな？」

「ああ。ここから歩いて十分もすれば着くらしい。——
というか、君は知らないのか？」

言いながら、ウェブサイトを印刷してきたらしい瑞龍寺までの地図を手渡ししてくれた。

「高岡の観光名所なんて、高岡大仏くらいしか行った覚えがないな」

「そこもいいねえ。時間が余ったら後で行ってみようか」
そう言つて、外の世界について屈託なく笑いながら話

す冬木の姿はやはり僕の中に違和感を残すもので、僕は
この友人についてなにも知らなかったのだということ
今更ながらに思い知らされたのだった。

自分の中に在る名状しがたいものを払拭するべく、地
図と現在地を照らし合わせて歩き始めた僕の背中に冬木
の声が投げかけられた。

「そうそう、高岡といえは藤子不二雄の出身地だけど、
藤子先生ゆかりの場所なんてのはこの近くにあってたり
するのかな？」

冬木の問いに、僕は薄っぺらな観光用知識を引つ張り
出そうとするがどうにもめぼしいものは出てこない。

「記念館みたいなのはあったかわからないな。ただ、市
内にドラえもん散歩道、というのがあったはずだ。あ
と、高岡から城端までを繋ぐ城端線っていうローカル線

では忍者ハットリ君のペイントがされたハットリ君電車
が走ってる」

「そうなのか。さっき、高岡駅構内にいる間に見ておけ
ばよかったな」

意外に食いついてくれたようだ。

「あとは観光スポットじゃないけど、——今もあるのか
知らないけど——富山大学にはドラえもん学のゼミだか
授業があったな」

「ああ、それはテレビで見たことがあるな」

「ただ、やっぱり観光として藤子不二雄やドラえもんの
ルーツを辿れるようなものはないかもしれないな」

「それは仕方ないな。今日のところは瑞龍寺だ。二十二
世紀の話はこれまでにして、今からは十七世紀だ」

冬木の声に、地図から顔を上げると、瑞龍寺の総門が
見えてきた。

「さすが国宝だな。立派過ぎて、寺の門というよりこれ
じゃあ城門級だ」

「城門、か。そうだな」

そう言つて冬木はポケットから財布を取り出す。

「拝観料は五百円だ。それと、その総門は国宝じゃなく
は重要文化財だ。瑞龍寺の国宝は寺域内の山門・仏殿・
法堂だ」

国宝級に壮大な総門を抜け、山門へ向かう。

山門（三門）とは、寺院の正面に配置される門のことであり、法隆寺の南大門などがそうである。なにも下調べをすることのなかった僕は、瑞龍寺の山門も南大門のような落ち着いた佇まいであると勝手に思っていた。しかし、瑞龍寺のそれは上下二層構造になっており、その威圧感は僕どころか冬木でさえもため息を漏らすほどであった。

「こういう、いわゆる二階建ての造りを重層入母屋造りと呼ぶらしい。下層の左右には金剛力士像があるそうだと見てみよう」

冬木の声が、どこか上ずって聞こえる。この山門の迫力に興奮しているのか、それとも「奥に在るもの」への期待が触発されてしまったのかは、僕には窺い知ることが出来なかった。

僕はしばらく呆けた様に左右の金剛力士像を見比べていたが、ふと冬木を見ると、彼の視線はすでに金剛力士像から、その先にある仏殿の方に向いていた。

「冬木？」

「もう次へ行つて大丈夫か？」

「ああ。お前のペースで行つてくれて大丈夫だ」

そうか、ありがとう、と微笑んで冬木は歩みを進めた。

仏殿への道は石畳が敷かれており、その周りを芝生が囲んでいた。総門と違って砂利ではないのが少し意外だ。

石畳を中ほどまで進んだところで冬木が仏殿を、いや、正確には仏殿の屋根を指差す。この仏殿も二層構造、入母屋造りだ。

「弓月、あれをどう思う？」

「屋根か？ そうだな。色味が違うな。白っぽい、灰白色でも言うのかな？ 多分こっちの、北陸で使われている瓦じゃないんじゃないかな。こっちは釉薬を使つて丈夫にしてるからつややかなんだが——素焼きか？」

「いや、素焼きじゃない。それだと北陸の天候が許してくれない。ほら、君も富山の話になるとよく愚痴つていただろう？」

北陸の天候——瓦に関係して、僕が愚痴ること？ 今までの冬木との会話を思い出す。

「雪か！」

「正解」

冬木がにやりと笑う。今日は珍しくよく笑う日だ。

北陸の雪は日本の水分を多く含んだ雪質をしており、パウダースノーには程遠いほど水っぽく、重い。

そのため、屋根に積もる雪の重みが住居にかける負担は甚大だ。お隣の新潟での地震被害の際、仮設住居が雪の重みのために軋みを立て避難住民を不安にさせたこと

もある。

「北陸の、太平洋側の人間には想像できないほど重い雪が、強度的に不安のある素焼きの瓦に積もればどうなるか、わかるな？」

ゆつくり頷く。当然割れてしまい、雪を軒下に落とすことは出来なくなり建物に負担をかけてしまうことだろう。

「じゃあ、なんで釉薬を使ったこっちの瓦じゃないんだ？」

「当時はまだ使われていなかったんだろう。資料に不安はあるが、調べた限りはそうだった」

準備のいいことだ。

「つていうことは、あの瓦は一体なんなんだ？」

「鉛だよ。屋根の下を見てみる。木材が退色してるだろ？」

鉛害だ」

「なるほど、鉛害と雪害の二択だったわけか」

「そういつて屋根を見上げる僕に、冬木が言った言葉は、

「と、ここまでが建前」

「は？」

僕は一体どんな顔して冬木を見たのだろうか。冬木が苦笑を浮かべて続ける。

「当時の前田家の置かれていた立場や時代背景を考えると、ただの雪害対策だけではないとも考えられる」

「時代背景？」

「世は徳川の天下だが、前田家はどういう立場だったかくらいは知ってるな？」

さすがにそれは知っている。前田家初代藩主利家は豊臣秀吉の朋友だ。

「豊臣方に付いていたからな。いわゆる外様大名というやつだったんだろう」

「その通り。他の外様大名が減封・転封させられる中で加賀百万石、なんて膨大な石高を治められたのが奇跡的なくらいだ」

「で、その前田家の外様大名という立場がどうしたって言うんだ」

「反乱分子の力を削ぐために、江戸幕府はある法令を制定した。一国一城令だ」

「一国一城令。一つの藩に対して一つの城のみを残し、その他を廃城とするように定めた制度である。大藩では複数の城を持つ例も見られたが、外様の前田家には到底期待できなかったことだろう。」

「当時の高岡には二代藩主利長の隠居城として築かれた高岡城があったが、利長の死亡した翌年に発布されたこの一国一城令により廃城された」

「高岡城の存在は知っていた。今は高岡城址公園として開放されている。」

「さて。利長の菩提寺を建立しなければならぬ三代藩主利常。時を同じくして一国一城令で軍事を削がれてしまったわけだが、金沢城以外の要所として城塞を確保しておきたいとは誰もが考えることだと思わないか？」

「おい、お前まさか——」

思わず周囲を見回してしまふ。

「この瑞龍寺が、城塞なんだよ」

なにも言わず硬直する僕たちを静寂が包む。そういえばもう蟬が鳴くような季節ではないのだと、どうでもいいことが頭をよぎる。

静寂を、子供たちの声が打ち破る。課外授業中の中学生だろうか？ 制服の男女グループが通り過ぎ、仏殿に入っていく。

「お前、さすがにそれは——」

「あり得るだろう。当時の瑞龍寺は周囲に堀を巡らし、その寺域は三万六千坪もあったそうだ。城郭そのものだろうか？ それに君もあの総門を見て言っていたじゃないか。まるで城門のようだ」と

「——っ！」

なにも言えない僕をよそに、冬木は悠々とペットボトルのお茶で喉を潤している。

「さて、こうして長々と話していたけど、屋根の話に戻ろうか」

そういえば、そこから始まった話だった。

「こうして、城塞としての機能も持つ菩提寺として建立された瑞龍寺において、雪害対策という建前のもとにわざわざ鉛の屋根を用いる理由とは」

「銃弾への転用か」

冬木が意外そうな目で僕を見る。軍事目的だと限定されれば僕にもなんとかわかった。冬木は小さく頷く。

「そういうことだ」

「この、仏殿の屋根の謎が、今回の目的だったわけか」

言いながら、僕もお茶を飲む。これで変な緊張感から開放され、普通の観光を楽しめるわけだ。

「いや、今の話は俗説として知られている話だ。調べればすぐに行き当たる類のね。僕の抱える謎はもつと奥の、法堂に在る」

求めるものは、ここよりもまだ奥に在るもの、か。

仏殿の内部も見事な造りだった。先ほどの中学生や数人の老人が上を見上げていたのになにかと僕たちも見てみると、構造材が密に入り組み、建築様式自体が装飾的で、整然と美しいものであった。

ちなみに御本尊は釈迦如来。脇には文殊菩薩と普賢菩薩が控える形だった。冬木曰く、宗派などにより違いは

あるが、スタンダードなタイプであるらしい。

勿体無い話だが、法堂へと焦る気持ちからか僕たちは仏殿をゆっくり見ることなく、そそくさと法堂へと向かった。

法堂に上がると、冬木は左右に延びる回廊には目もくれず六室が三室ずつ二列に配置されている部屋の内、中央奥の内陣に足を運ぼうとしていた。

「学生さんですか？」

向かって右の部屋、土産物売り場のコーナーがある一角から、誰かが声をかけてきた。

僕も冬木も思わず足を止めそちらを向く。声の主は、朱色の地に金糸の紋様の入った袈裟を着た壮年の僧だった。

「はい、そうですけど——」

なにか失礼なことでもしていたのだろうか？ と不安がよぎる。

「歴史か、建築あたりを学ばれているとか？」

「いえ、趣味の一環で、僕がこちらの、利長公の大位牌について知りたいことがあります」

冬木の言葉に住職がほう、と感嘆らしき声を漏らす。

「私、いつもはこちらでお客様に観光案内の真似事をさ

せていただいているんですが、もし宜しければおそらく貴方が知りたいであろうことについてだけでも、ご案内いたしましょうか？」

冬木と住職の間に意味ありげな笑みの応酬がされる。

「是非とも、お願いします」

「では、まずはこちらにおいでください」

住職は入り口から見て右手の回廊の障子窓まで僕たちを誘導する。その静かな物腰に、僕は改めて厳肅さと呼ばれられるような気がした。

「先ほど仰られた利長公の御位牌から、ある場所までを直線で繋ぐ位置にこの窓はあるんですが、お解かりになりますか？」

今日何度目のクイズだろう。

窓の外の風景を見る限り、瑞龍寺内の施設ではなさそうだ。その向こうにあって、四百年前からあるものと言えよ——

「立山たてやまですね」

僕の言葉に住職が驚きを禁じえないかのような表情で、

「よくご存知ですね」

富山県民にとっては常識的な存在だが、ここは素直に受け取って、僕が富山県民であることは言わないほうがいいかも知れない。

「立山は霊山として知られています。当時の信仰の形態

を考えると、こうして立山から御位牌の元へと魂が帰って来られるようにしている、と考えられるのですね。今の世の価値観からすれば非科学的で馬鹿げた話と思われるかもしれませんが、昔の宗教への信仰の強さというのはそう考えさせるほどのものだったんですよ」

富山の神話や民話で立山に関する話が多いことを知っている身としては、確かに実感は伴わないものの住職の話もある程度は理解できる。ただ、それが冬木の求める謎に繋がるのか――？

「このような敷地の向こうの景色を取りいれる手法を借景と言うそうです。なかなか風流でしょう。このように景色を切り取る手法が、おそらく貴方方の知りたいことの答えになるのではないかと思います」

ではこちらへ、と住職は利長の位牌のある内陣へと歩みを進める。敷居を過ぎる際にお辞儀をする住職に釣られ、僕も軽く頭を下げる。

中央手前の部屋で足を止め、住職が天井を仰ぐ。

「天井をご覧ください。狩野安信による百花草の絵です。こういったところにまで気が配られているんですね。そして、視線を下げて、欄間には鳳凰が刻まれています。これはこの瑞龍寺の宮大工自身の手によるもので、欄間職人に別に作らせたものではないんです。いわゆるトータルプロデュースと言うやつですか。各分野の装飾を分

業で作らせた日光東照宮とは対照的なんですな」

内陣との境には部屋を三分分するように二本の柱があり、三分分されたうちの中央が少し高い段違いの形で欄間が彫られている。他の部分と違う赤茶色の材木が用いられており、確かな存在感を浮き立たせていた。

しかし、言われてみれば鳳凰という壮大なテーマでありながらも主張しすぎず、法堂の雰囲気にもうまく調和しているようにも思える。

「さて、そのような配慮がなされているながら、この内陣には本来あるべきものが欠けているんです。それが、貴方方の知りたいことなんですよ？」

「ええ」

住職の問いに冬木が答える。僕にしてみれば、これですと冬木が求めていた謎の正体がわかるわけだ。

じつ、と内陣を観察する。その部屋全体が仏壇であるかのように、金箔の貼られた襖を背景に、最奥に位牌が配置され、大型の鈴（読経の最初や最後に鳴らす鉢状の仏具）や香炉、経卓など基本的な仏具は一通り揃っているように見える。しかし、そこになにかが足りないと言われれば、確かにそんな気もする。宗教に関して素人の僕でも違和感を覚えるくらい明らかかな何か、足りないのだ。

「弓月、正解を言って大丈夫か？」

「ああ。なにかがない気はするけど、どうもわからない」
「まあ、余りにも大胆だからな。盲点なんだろう。——
それでは、住職にお聞きします。なぜこの内陣には仏像
が存在しないのでしょうか？」

「あ！」
思わず声が出てしまう。冬木と住職はこちらを一瞥し
ただけで話を続ける。

「菩提寺であれば、通常、その位牌は仏像の許に置いて
弔われるものです。でも、こちらの内陣では位牌が単独
で置かれている。もしも僕の知らない、宗教上の理由が
あるならお教え願いたい。しかし、そうではなく、且つ
これが故意であるならば、瑞龍寺には大きな秘密が隠さ
れていると考えることが出来ます」

「ぜひ、お聞かせいただきたいですね」

どうぞ楽に、と座るよう促される。

これまでに僧侶の説法を聞くことはあったが、僧侶に
己の悟りを聞かせる光景に居合わせるのは初めてだ。

「先ほどまで、僕たちは仏殿の鉛の屋根を見て話してい
たことがあります。この瑞龍寺は、寺ではないのではな
いか、と」

「ちよつと待ってくれ冬木。確かにそういう話はしてい
たが、仏像が内陣にないことと、瑞龍寺が城塞であるこ
とになにか関係があるのか？」

「いや、そうではない。この内陣の特殊性から、ここが
ただの菩提寺であるとは考えられない。とは言え、それ
ゆえにイコール城塞であるというわけでもない。なぜ内
陣に仏像がなく、位牌だけが置かれているのか。それは、
そこに既に神仏が存在しているからではないでしょう
か」

「神仏？ だって内陣にあるのは——おい、その神仏つ
ていうのは、まさか——」

「そう、前田家二代藩主、利長だ」

冬木の視線の先には、利長公の位牌が鎮座している。
「弔うための菩提寺としてではなく、神として奉るため
に瑞龍寺が作られたと考えれば、利長公の位牌だけがこ
の内陣に置かれている理由は説明できるんです」

住職は無言で冬木を見詰めている。

「しかし冬木、なんだってそんな面倒くさいことをする
必要があるんだ？ お前の言うことが本当だとして、隠
れるように奉る理由なんてあるのか？」

冬木はなにも言わずに僕の後ろに視線を送る。振り返
ると、そこには仏殿が見える。

「その理由は、前田家の立場、と言うよりは徳川の威光
と言った方がいいか」

仏殿を見ながら冬木の声を背に受ける。

「現在までに、人から神となった人間はそれなりに存在

しているが、ほとんどは天皇だ。例外として、当時の朝廷を崇り、それを沈めるために天神様として奉られた菅原道真なんかもあるがな」

冬木の言葉に頷く。富山では他県に比べて天神様信仰が強く根付いているからその実感もひとしおだ。富山や福井では長男が生まれた家は、正月に天神様の木彫りの像や掛け軸などを奉っているのだが、それが全国的な風習ではないのだと知ったときは驚いたものだった。

「それほど特権的な存在である神という位だ。そう簡単に表立ってなれるものではないし、なにより、当時の日本には既に現人神となっていた人物がいるわけだ。勿論、東照大権現徳川家康公だな。さて、家康が神となることで、徳川家の威光はより一層強大なものとなった。そんな状況下において、一大名を神として奉ろうとするのはどうということか？ まず徳川家に対する不敬と採られるのは間違いないだろうな。事が事だけに、お家取り潰しにまでなる可能性もある。菩提寺に見せかけて神として奉納した事実を隠蔽する理由としては充分だろうか？」

沈黙が流れ、僕は仏殿から目を離し、位牌の方に振り返る。同じく位牌を見ていたらしい住職が振り返ると丁度目が合った。

「あの、住職は今のお話についてどうお思いになられますか？」

今はなによりも、ここに生きる人の声が聞きたいと思つた。冬木の推理を遮る様なことをしなかつたのは、一体どんな感情によるものなのだろうか。仏道に生きるこの人は、今の話を聞いてどう思うのだろうか。

住職は微笑を浮かべたまま、ゆっくり僕たちの顔を見回す。

「考えられることだと思えますよ。と言うより、私もそうであると考えています」

思わず絶句した。この人は既にその考えに行き着いていたというのか。それでいてここに居続けることに対して、この人はどう思っているのだろうか。

「私もここに初めて来たときは、あの御位牌を見て驚いたものです。なぜ御本尊の傍にいらつしやらないのか、と」

住職の向こうに見える位牌に、改めて存在感を感じる。三百五十年の時を生きたこの位牌には、様々な思いが去来していたのだということが感じられたためだろうか。

「私も私なりに当時の前田藩の状況などを調べ、先ほどと同じ結論に行き当たりました。そうしていく内、この法堂を調べると興味深いものが隠されていました。こちらまでいらしてください」

そう言つて住職は法堂の入り口まで歩いていく。外にも行くのかと思つた矢先に住職は立ち止まり、振り向

く。「こちらから、内陣の方をご覧になってみてください」
言われるがまま、住職の立っている場所まで行き、振り返る。

「先ほど、そちらの回廊で借景の話を致しましたね。少し違うかもしれませんが、窓枠に切り取られた景色に意味を持たせたように、こちらでもそれが見られるのです。手前の部屋により、奥の内陣が切り取られて見えますね。段違いだった両隣の欄間が隠された形です。見覚えがあると思いませんか？」

赤みがかった材木により作られる、この形は――

「鳥居か！」

「鳥居ですね」

僕と冬木の声が重なる。住職はゆっくりと頷く。

この法堂に入るとき、誰もがそこに一瞬鳥居の姿を見ることがなるのだ。それはまるで、この法堂が神社の入り口として、僕たちに鳥居をくぐらせているかのように思えた。

「驚いていただけましたか？ まあ、正史に書けないことである以上、これらの考えもこじつけや俗説として唾棄されかねないものです。これが利常公の心の中の問題である以上は、永劫に答えなど出ないものです」

三百五十年以上の時間を経て、自分が触れた謎の姿に

圧倒され、僕は大きいため息をついた。

「さて、この件に関して私が言うことはもうございませんが、最後に一つ、別の面白いものをお見せしましょう」
そう言って、住職が柔らかな笑みを浮かべた。

住職が右手奥の部屋に歩いていくのに僕たちもついていく。そこにはなにやら神仏が描かれた墨絵が、そしてその奥、進入禁止を告げる赤いロープの向こうには同じ構図の木像がケースに入れられて展示されている。画面左側で左足を高く持ち上げた何者かが、右下に鎮座する小動物を睨みつけて、今にも踏んでしまおうかというところのようだ。

「左におわしますのが烏^う枢^す沙^さ摩^ま明^{めい}王^{わう}です。不浄の神、まあ簡単に言ってしまうえばトイレの守り神ですね。そして、その足元の、猪の姿をしているのが、亥子神です。田の神ですが、ここでは不浄な行いがあったために縛り上げられ足蹴にされています」

なるほど。墨絵の隣のパネルには同様の説明書きと、トイレに貼るお札販売の旨が書かれていた。お土産に一度いいかもしれない。

「そちら、木像の方には亥子神の耳がありませんね」

冬木の言葉を聞き、僕も絵と木像を見比べてみる。確

かに。木像の方には亥子神の耳がなく、どことなく鳥の
ような姿になってしまっている。

「一目見ただけでよくお気づきになりましたね。そう
なんですよ。とは言っても、残念ながらこれには特に深
い意味はありません。ただ単に鼠が齧ってしまったんだ
ろうということです。しかし、実はですね、今と同じ質
問がある方もしているんですよ」

「ある方とは？」

誰だろう。ひよつとして、やんごとなき身分の方とか
だろうか。

「声優の大山のぶ代さんです」

先代ドラえもんか。——僕の中では今も昔もこの人し
かドラえもんはいないのだが。

「私が『鼠に齧られたんだろう』って話しますと、大山
さんがね、もう一つ質問をしたんです。『藤子先生って、
どちらの出身でしたっけ？』って」

僕と冬木は思わず顔を見合わせる。

出会うことはないと思っていた、二十二世紀よりの使
者のルーツは、ここに、十七世紀にあったのだ。